

明るき世界へ

小川未明

青空文庫

一 小さな芽

「小さな木の芽が土を破つて、やつと二、三寸ばかりの丈に伸びました。木の芽は、はじめて広い野原を見渡しました。大空を飛ぶ雲の影をながめました。そして、小鳥の鳴き声を聞いたのであります。（ああ、これが世の中というものであるか。）と考えました。」

どれほど、この世の中へ出ることを願つたであろう。あの堅い土の下にくぐっている自分には、同じような種子はいくつもあつた。そして、暗い土の中で、みんなはいろいろのことを語り合つたものだ。

「早く、明るい世の中へ出たいのだが、みんながいつしよに出られるだろうか。」と、一つの種子がいうと、

「それはむずかしいことだ。だれが出るかしなければならないけれど、あとは腐つてしまふだろう。しかし出たものは、死んだ仲間の分も生きのびてしげつて、幾十年も、幾百年も雄々しく太陽の輝く下で華やかに暮らしてもらいたい。もし、二つなり、三つなりが、いつしよに明るい世界へ出ることがあつたら、たがいに依り合つて力となつて暮らしそうじゃない

か。」と、他の種子が答えました。

みんなは、その種子のいったことに賛成しました。しかしみんなが明るい世界を慕ったけれど、そのかいがなく、土の上に出ることを得たものは、ただ一つだけでありました。こうして、一本の木の芽は、この世界に出たが、見るもの、聞くものに心を脅かされたのであります。みんなの希望まで、自分の生命の中に宿して、大空に高く枝を拡げて、幾万となく群がった葉の一つ一つに日光を浴びなければならぬと思いましたが、それはまだ遠いことでありました。

最初、この木の芽の生えたのを見つけたものは、空を渡る雲でありました。けれど、ものぐさな無口な雲は、見ぬふりをして、その頭の上を悠々と過ぎてゆきました。

木の芽は、鳥をいちばんおそれていたのです。それは、代々からの神経に伝わっている本能的のおそれのようにも思われました。あのいい音色で歌う鳥は、姿もまた美しいには相違ないけれど、みずみずしい木の芽を見つけると、きつと、それをくちばしでつついて、食い切ってしまうからです。そのくせ、鳥は木が大きくなつてしげったあかつきには、かつてにその枝に巢を造つたり、また夜になると宿ることなどがありました。そんなことを予覚しているような木の芽は、小鳥に自分の姿を見いだされないように、なるた

け石の蔭や、草の蔭に隠れるようにしていました。

口やかましい、そして、そそかしい風が、つぎに木の芽を見つけました。

「おお、ほんとうにいい木の芽だ。おまえは、末には大木となる芽ばえなんだ。おまえの枯れた年老った親は、よくこの野原の中で俺たちと相撲を取ったもんだ。なかなか勇敢に闘ったもんだ。この世界は広いけれど、ほんとうに俺たちの相手となるようなものは少ない。はじめから死んでいるも 同然な街の建物や、人間などの造った家や、堤防やいっさいのものは、打衝つていつても、ほんとうに死んでいるのだから、俺が打衝つてゆかない。そこへいくと、おまえたちや、海などは、生きているのだから、俺が打衝つてゆくと叫びもするし、また、戦いもする。俺は、じつとしていることはきらいだ。なんでも駆けまわつていたり、争つたり組みついたりすることが大好きなのだ。」

木の芽は、まだ地の上に産まれてから、幾日もたたないので、ものを見てもまぶしくてしかたがないほどでありましたから、こう、風におしやべりをされると、ただ空怖ろしいような、半分ばかり意味がわかつて半分は意味がわからないような、どきまぎとした気持ちでしたのであります。

「しかし、おまえは、大木になる芽ばえだというものの、それまでには、おおかみに

踏ふまれたり、きつねに踏ふまれたりしたときには、折おれてしまおう。そうすれば、それまでのことだ。だから体を鍛きたえなければならぬ。」と、宇宙うちゅうの浮浪者ふうろうしやである風かぜは、語かたつて聞きかせました。

哀あわれな木きの芽めは、風かぜのいうことをともかくも感心かんしんして聞きいていましたが、

「それなら、どうしたら、私わたしは強くなるのですか。」と、木きの芽めは、風かぜに問といました。

風かぜは、いちだんと悲痛ひつうな調子ちようしになつて、

「それには、俺おれがおまえを鍛きたえるよりしかたがない。いまおまえは、まだ小ちいさくて教おしえても歌うたえまいが、いんまに大きくなつたら俺おれの教おしえた『曠野こうやの歌うた』と、『放浪ほうろうの歌うた』とを歌うたうのだ。」と、風かぜは、木きの芽めにむかつていいました。

無窮むきゆうから、無窮むきゆうへ

ゆくものは、だれだ。

おまえは、その姿すがたを見みたか、

魔物まものか、人間にんげんか。

黒くろい着物きものをきて

破やぶれた灰はい色いろの旗はたがひるがえる。

風は、歌つて聞かせました。そして、強く、強く吹き出しました。木の芽ばかりでなく、野原に生えていた、すべての草や、林が、驚いて騒ぎ出しました。中にも、この小さな木の芽は、柔らかな頭をひたひたとさして、いまにもちぎれそうでありました。

粗野で、そそっかしい風は、いつやむと見えぬまでに吹いて、吹いて吹き募りました。木の芽は、もはや目をまわして、いまにも倒れそうになったのであります。

このとき、太陽は、見るに見かねて、風をしかったです。

「なんで、そんなに小さい木の芽をいじめるのだ。おまえが騒ぎ狂いたいと思つたなら、高い山の頂へでも打衝るがいい、それでなければ、夜になってから、だれもない海の真ん中で波を相手に戦うがいい。もうこの小さな木の芽をいじめてくれるな。」と、太陽はいいました。

風は、太陽に向かつて飛びつきそうに、空へ躍り上がりました。そうして叫びました。「私は、この小さな木の芽をいじめるものではありません。強く、強く、強くならなければ、どうしてこの曠野の真ん中でこの木の芽が育い立ちましよう。そうするには私が、木の芽を、強くするように鍛えなければならぬのです。」

太陽は、あきれたような顔つきをして、しばらくぼんやりと見下ろしていましたが、

「私のいうことを守らんと、おまえを三千里も四千里も遠方へ追いやってしまうぞ。これから、芽が大きくなるまで、おまえはけつして、あんなに烈しく吹いてはならない。」と、太陽は風に命じました。

風は、声低く、「放浪の歌」をうたいながら、海の方をさして去ってしまいました。後で、太陽は哀れな木の芽をじつとながめたのであります。

「もう驚くことはない。おまえを苦しめた風は遠くへ去ってしまった。これから後は、私がおまえを見守ってやろう。」と、太陽はいいました。

木の芽は、生まれて出た世の中が予想をしなかったほど、複雑なのに頭を悩ました。そして、空恐ろしさに震えていました。

「おまえは寒いのか。なんでそんなに震えているのだ。」と、太陽は、怪しんで聞きました。

木の芽は、風に吹かれて、体がたいへんに疲れてきました。そして、のどがこのうえもなく渴いていたので、ただ雨の降ってくれることを望んでいましたが、しかし、そんなことを口に出していいもされずに、不安におそわれて震えていたのです。

「かわいそうに、おまえは、ものがいえないほど寒いのか。それで、震えているのだらう。」

もう安心あんしんするがいい。風かぜは、あちらへいつてしまった。私わたしが、おまえを思いきつて暖めあたためてやるから。」と、太陽たいようはいいました。

そして、太陽たいようは、急に熱あつと光ひかりをましました。その熱あつは雲くもを散さんじてしまいました。そして、やっと地ちの上に伸びのびたばかりの木きの芽めは、小さな葉はがしぼんで、細ほそい幹みきは乾かわいて、ついに枯かれてしまいました。

太陽たいようは、そのことには気づきわずに、日暮ひぐれ方がたまで下界げかいを照てらしていました。

二 幸福こうふくの島しま

ある国くににあつた話はなしです。人々ひとびとは、長い間ながあいだの版はんで押おしたような生活せいかつに疲つかれていました。毎日まいにち同じようなことをして、朝あさになるとはね起きて、働はたらき、食くい、そして日ひが暮くれると眠ねむることに飽あきてしまいました。

みんなは、仲なかよく暮くらすことを希望きぼうしていましたけれど、どうしても、このことばかりはできなかったというの、ある人ひとがたくさん金かねがもうかったときには、一方いっぽうではまたたいへんに損そんをするというようなくあいで、みんなの気持きもちがいつも一つではなかったか

ら、怒るものもあれば、また喜ぶものがあり、中には泣くものまた笑うものがあるというふうで、その間に嫉妬、嘲罵の絶える暇もなかったものでありました。

「ああ、なんで俺たちは、産まれてきたのだろう。産まれたかいがないというものだ。毎日、こんなような同じことを繰り返して死んでしまわなければならないのか？」と、人々とはため息をついていました。

春になると、花が咲きました。ちょうどその国全体が花で飾られるようにみえました。夏になると、青葉でこんもりとしました。そして、秋がくる時分には、どこの林も、丘も、森も、黄色になつて風のまにまにそれらの葉が散りはじめました。冬が過ぎ、また春がめぐってくるというふうに繰り返されたのであります。

この国には、昔からのことわざがありまして、夏の晩方の海の上のうろこ雲のわいた日に、海の中へ身を投げると、その人は貝に生まれ変わる。また、三年もたつと、海の上のうろこ雲がわいた日に、その貝は白鳥に変わってしまう。白鳥になると自由に空を飛ぶことができる、白鳥は遠い、遠い、沖のかなたにある「幸福の島」へ飛んでゆくというのであります。

「幸福の島があるというが、それはほんとうのことだろうか。」

ある人が、この国でいちばん物知りといううわさの高い人に向つて問いました。物知りはもうだいふ年をとつた、白髪しらがのまじつた老人ろうじんでありました。

「それはほんとうのことだ。幸福こうふくの島へゆけば、いまこの国でまちがつているようなことは、たとえ見ようと思つても見られない。そのうえ、山へゆけば木がしげっている。土を掘ればいい水がわいてくる。岩を破れば、金・銀・銅・鉄などが光っている。野原には花が咲き乱れ、田や、畠にはしぜんと穀物が茂つている。そこへさえゆけば、人は眠つていて楽に生活がされるから、たがいに争うということを知らない。ただ、しかしその幸福の島へいくのが容易でない。波が荒いし、恐ろしい風が吹く、また、深い海の中には魔物がすんでいて、通る船を覆してしまふ。だれも、まだその島にいったものがないが、島には、人間が住んでいるということだ。また幸福の島の女は、天使のように美しいということだ。昔から、その島へいつてみたいばかりに、神に願をかけて貝となつたり、三年の間海の中で修業をして、さらに白鳥となつたり、それまでにして、この島に憧れて飛んでゆくのであつた。白い鳥は、その島にゆくと、花の咲いている野原の上で舞うのである。またあるときは、いつも緑の色の変わらない林の中で歌い、あるときは、美しい女の肩に止まつて愛されもするというのが、じつに不思議なことだ。」

物知りの老人は答えました。この話を聞いた人は、目をみはりました。そして驚きました。

「なぜ、こんな不思議な話をもつと早く、みんなに聞かせてはくださらなかったのですか。」と、老人に向かつていいました。

「こういう話は、世の中を騒がせるものだから、あまりしないほうがいいと思つたのだ。」と、物知りは答えました。

この話は、いつか国じゆうに伝わり広まつたのであります。

生活に興味を失っている若い人々の中では、毎日うなだれて沈んでいるものもありましたが、一命を賭けても、幸福の世界を見い出したと思つたものもありました。そして、夏の日が海のかたに傾いて無数のうろこ雲が美しく花弁のように空に散りかかったときに、身を投げて死んだものもありました。

こうして、死んだ人々に対しては、だれも悲しいというような感じを抱きませんでした。このままこの国に朽ちてしまつて土となるよりは、生まれ変わつて幸福の島へゆくことがどれほど楽しい愉快なことであるかしれなかつたからです。

そして、海の中に身を投げて死ぬほどの勇氣もなく、いたずらに、醜く年を取つて木の

枯れるように死んでしまうことが、その美しい死に較べたら、どんなにか陰気で、また暗い事実でありましたでしょう？

日が沈むころになると、毎日のように、海岸をさまよつて、青い、青い、そして地平線のいつまでも暗くならず、明るい海に憧れるものが幾人ともありました。海は、永久にたえず美妙な唄をうたっています。その唄の声にじっと耳をすましてい

ると、いつしか、青黒い底の方に引き込められるような、なつかしさを感しました。まれには、月の光が、波の上を静かに照らす夜になってから、感がきわまつて、とつぜん海の中に身を躍らしたのもあつたのです。

生まれ変わるといふ信仰が、どれほど味気ない生活に活気をつけたかしれません。「死」ということがこんなに、このときほど意義のあることに思われたかわかりません。

「死なずに幸福の島へ渡れないものだろうか。」

多くの人々の中には、身を海に投げてしまつて、はたして、ふたたび生まれ変わるだろうかという疑いをもつたものもおります。その人々は死なずに、どんな冒険でもやつてみて、その島へたどり着きたいものだと思ひました。そして、そのことを年よりの物知りにたずねました。

「ゆけないこともあるまいが、なにしろ遠い。その島へ渡るまでには怖ろしい風の吹いて
いるところがある。また、大波の渦巻いているところがある。魔物のすんでいる深い海
をも通らなければならぬ。その用意が十分できるなら、ゆけないこともないだろう。」
と、なんでも知っている老人は答えました。

考え深い、また臆病な人たちは、たとえその準備に幾年費やされても十分に用
意をしてから、遠い幸福の島に渡ることを相談しました。

それからというものは、みんなは働くことに張り合いを得ました。あるものは、海を渡
る船について工夫を凝らしました。あるものは、いろいろな器具について考えました。ま
たあるものは、その島についてからのことなどを研究して頭を悩ました。しかし
その悩みは、行く末の幸福を得ることのために愉快でありました。早く、その未知の島
にゆきたいものだと思ひなは心で思いました。どんな困難や辛苦がこの後あつてもそれ
を切り抜けてゆこうという勇氣がみんなの心にわいたのであります。

太陽は、赤く、暮れ方になると海のかなたに沈みました。そのとき、炎のように見え
る雲が地平線に渦巻いていました。

「幸福の島は、あの雲の下あたりにあるのだろう。」と、みんなはその方を望みなが

ら、いいました。やがて、日がまったく沈んで、空の色がだんだん暗くなると、地平線は波に洗われて、雲の色の消えてゆくのを惜しんだのであります。

ある日のこと、人々がいつものごとく、海岸に立つて沖の方をながめていました。そのとき、なにか一つ黒い点のようなものが、夕空をこなたに向かつてだんだん近づいてくるように見えたのであります。みんなはしばらく、目をみはってそのものに気をとられていました。

「あれは、なんだろうか。こちらに向かつてこいでいるようだ。」

「幸福の島から、魁をして、こちらの国へやってきたのではないか。」

「なんにしても、いまに着いたら、すこしぐらい沖のようすがわかるだろう。」と、みんなは、くびを差し伸ばして黒いもののこの岸に近寄るのを待っていました。

だんだんとその黒いものは近づいたのであります。すると、小さな船で、それには三人のものが乗っていたのであります。やつとその船は汀に着きました。船から下りた三人のものは、目ばかり鋭く光って、ひげは黒く、頭髮はのびて、ほとんど、骨と皮ばかりにやせ衰えていたのです。

「みんな俺たちの顔をば忘れてしまったろう。十年ばかりまえに沖へ出て、大風のため

に遠くへ流されたものだ。」と、その中のいちばん背の高い男がいました。

人々は、十年ばかり前にあつた大暴風雨の夜のことを記憶から呼び起こしました。そして、三人のものがいまだに行方不明であることを思い出したのであります。

「よく帰つてきた。もうみんなは死んだものと思つていた。おまえたちは、幸福の島にでも救われていたのか？」と、群集の中から、一人がいいました。

「幸福の島？」と、そのとき、三人の中一人が、自分の耳を怪しむように、大きな声で聞き返しました。

「そうだ。幸福の島に長い間、住んでいたかと聞くのだ。」と、群集の中から一人が答えました。

「ばかにするのか？ 地獄から、やつと逃げ出してきた俺たちに向かつて、幸福の島とはなんのことだ？ おまえがたは、久々で帰つてきたものを侮辱するつもりなのか。」と、三人は、青い顔をして怒りました。

みんなは、意外なできごとに驚いて、三人をやつとのことではなだめました。「ちようど、ここから見ると、あの太陽の沈む、渦巻く炎のような雲の下だ。その島に着くと、三人はひどいめにあつた。朝から晩まで、獣物のように使役された。俺たちはど

うかしてこの島から逃げ出したいものだと思つたけれど、どうすることもできなかった。日が暮れると海辺へ出ては、火をたいて、もしやこの火影を見つけたら、救いにきてはくれないかと、あてもないことを願つた。三人は、ついに丘の上の獄屋に入れられてしまつた。そして、長い間、その獄屋のうちに月日を送つたのだ。たまたま月の影が、窓からみれると、その月を見て遠い海のかなたのふるさとをしのんだ。ある晩のこと、三人は、その窓から逃げ出した。そして、ようようの思いで、助かつてここまで逃げてきたのだ。」

と、三人は、くわしく物語りました。みんなは、年寄りの物知りにあざむかれたことを憤りました。

「ああ、俺たちはばかだった。あの老人が、自分でいきもしない『幸福の島』などというものを知っているはずがなかったのだ。あの老人を、だれがいつたい物知りなどといったのだ。そして、あの老人のおかげで幾人海の中へ身を投げて死んだかしのれない。」

みんなは、老人を海岸へひきずつてきました。そして、みんなをあざむいたことをなじりました。すると、老人は、案外平気な顔をしていました。

「昔は、『幸福の島』だったのだ。しかし、それがいま『禍の島』に変わってしまった

のだ。それをだれが知^しつていよう。けっして、私^{わたし}の罪^{つみ}じゃない。」

けれど、みんなは老人^{ろうじん}のいうことを承^{しょう}知^ちしませんでした。そしてついに老人^{ろうじん}を三人^{にん}の乗^のつてきた小船^{こぶね}に乗^のせて、沖^{おき}の方^{ほう}へ流^{なが}してしまいました。みんなは、これで復讐^{ふくしゅう}がとげられたと思^{おも}いました。もうこれからは、みんな物知^{ものし}りなどというものがいなくて、この国^{くに}の人々^{ひとびと}が迷^{まよ}わされる心配^{しんぱい}のないのを喜^{よろこ}びました。しかし、そうした喜^{よろこ}びもつかのまのことでありました。

みんなは、また、前^{まえ}のように生^いきている望^{のぞ}みを失^{うしな}ってしまいました。なんのために、自^じ分^{ぶん}らは、こうして味気^{あじけ}ない生^{せい}活^{かつ}をつづけなければならぬのか。

「禍^{わざわい}の島^{しま}でもいいからいつてみたい。」といって、まれには船^{ふね}を押^おし出^だしていくものもありました。

未知^{みち}の世界^{せかい}に憧^{あこが}れる心^{こころ}は、「幸福^{こうふく}の島^{しま}」でも、また、「禍^{わざわい}の島^{しま}」でも、極^{きよく}度^どに達^{たっ}したときは変^かわりがなかったからです。とにかく、みんなは、たがいに欲^{よく}深^{ぶか}であったり、嫉妬^{しつと}しあったり、争^{あらそ}い合^あったりする生^{せい}活^{かつ}に愛^{あい}想^{そう}をつかしました。そして、これがほんとうの人生^{じんせい}であるとは、どうしても真^{しん}に信^{しん}じられなかったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「明《あか》るき世界《せかい》へ」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明るき世界へ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>